

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	語彙部門におけるイタリア語複合語 : 「名詞+形容詞/形容詞+名詞」複合語から
Author(s)	上野, 貴史
Citation	ロマンス語研究 , 31 : 21 - 30
Issue Date	1998
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045487">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045487</a>
Right	Copyright (c) 1998 by Author
Relation	



# 語彙部門におけるイタリア語複合語

「名詞+形容詞/形容詞+名詞」複合語から

I composti italiani nella componente lessicale

- <nome+aggettivo/ aggettivo+nome> composti -

上野 貴史

Takafumi UENO

## 1. 目的

Scalise(1990)では、複合語を、(1)のような Composti Larghi(CL 複合語)と(2)のような Composti Stretti(CS 複合語)に分類して分析を行っている。

(1) Composti Larghi : prete operaio/ valigia armadio/ dolce amaro/ aiuto macchinista/ città dormitorio/  
trasmissione radio/ formazione base

(2) Composti Stretti : quintessenza/ soprabito/ lungarno/ crocevia/ camposanto/ altopiano/ lavapiatti

これは、Allen(1978)において、ウェールズ語複合語を Loose Compounds と Strict Compounds に分類して考察したものをイタリア語に応用したものとされる。イタリア語における CL 複合語と CS 複合語の特徴を Scalise (1990/1994)から要約すると、(3)のようになる。

(3)

	CL 複合語	CS 複合語
(a) i <i>pattern accentuali</i>	irregolari	regolari
(b) il <i>significato</i>	composizionale	opaco
(c) i <i>mutamenti vocalici</i>	assenza	presenza
(d) l' <i>Ipotesi di Ordinamento</i>	valido	invalido
(e) la <i>generazione</i>	formazione di parola	elencazione nel lessico

イタリア語の場合、(3a)に示したように、アクセントパターンの規則性から、明確に CL 複合語と CS 複合語の分類が可能である。例えば、(1)で示したような、第一要素(P<sub>1</sub>)と第二要素(P<sub>2</sub>)を分離して記述する複合語は、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の二カ所に第一強勢が生じ、語としてのアクセントパターンが不規則となるため、CL 複合語となる。一方、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を密着して記述する複合語は、ほとんどが規則的なパロクシトーンをとるため、CS 複合語となる。しかしながら、(3b-e)に列挙した特徴は、一般的傾向としては理解し得るが、多くの例外も見られる<sup>1)</sup>。特に、(3e)において、すべての CS 複合語がレキシコンに登録され、語形成規則の適用を受けないということは、CL 複合語と CS 複合語の二種類の形態を持つ複合語の存在を説明するのに困難であると思われる<sup>2)</sup>。

そこで本稿では、CL 複合語と CS 複合語に語形成規則を適用することにより、イタリア語複合語を再分析し、この二種類の複合語の生成構造を明らかにすることを試みる。特に、語彙部門内の屈折規則を分析する

ことにより、CS 複合語に語形成規則によって生成されるものと、初めからレキシコンに登録されているものの二種類が存在することを論証する。このため本稿では、数と性の一致の現象が顕著に現れる「名詞＋形容詞〈N+A〉／形容詞＋名詞〈A+N〉」複合語を扱うことにする。数に関して、イタリア語の複数屈折形態は、一般的に、語末の語尾屈折によって示されるが、複合語の場合、主要部の位置や要素間の緊密性の度合いなどから、複数形態は、複雑に現れる。しかしながら、名詞と形容詞の語彙範疇からなる複合名詞に関しては、複数屈折形態素を Infl で表すと、不変化のものを除くと、(4a)に示すような各要素末に Infl が出現するものと、(4b)のような複合語の語末に Infl が出現する二種類の複数形態に限定される<sup>3)</sup>。

(4) a. P<sub>1</sub>+Infl+P<sub>2</sub>+Infl

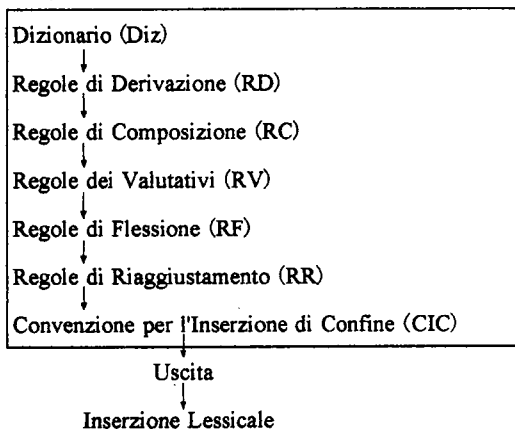
b. P<sub>1</sub>+P<sub>2</sub>+Infl

(4)に示した二種類の複数形態の差異が、語形成規則の適用の有無に起因するということを論じることにより、イタリア語複合語の内部構造と生成過程を明確にすることが本稿の目的となる。

## 2. 語彙部門のモデル

Scalise(1990)では、複合語や派生語の生成において、語彙部門を設定する(5)のようなモデルを提示している<sup>4)</sup>。

(5) Componente Lessicale



(5)の Dizionario(レキシコン)には、主に、派生語を取り去った parola (単純語)と、「単独では現れない、名詞と類似点が多い」という特徴を持つ semiparola<sup>5)</sup>が登録されており、派生規則以下の形態部門で規則適用を受ける。形態部門では、「拡大順序づけの仮説」<sup>6)</sup>により、Regole di Derivazione (派生規則)、Regole di Composizione (複合規則)、Regole dei Valutativi (評価接辞規則)、Regole di Flessione (屈折規則)という順序で適用を受けることになる。これらのうち派生規則と複合規則を語形成規則と呼び、複合規則により CL 複合語には#, CS 複合語には+の内部境界が付与される。これらの規則適用を受けた後、主に、語尾切断などが行われる Regole di Riaggiustamento (再調整規則)が適用され、Convenzione per l'Inserzione di Confine

(境界挿入の取り決め)によって外部境界が挿入され、Uscita (出力)となって生成された語彙が、文に語彙挿入される。例えば、「名詞+名詞」の語彙範疇からなる CL 複合語の aiuto macchinista を例にとってみると、(6)<sup>7)</sup>のようになる。

(6) Diz [aiuto]<sub>N</sub>, [macchina]<sub>N</sub>  
 RD [aiuto]<sub>N</sub>, [[macchina]<sub>N</sub>+ista<sub>ΔNN</sub>]<sub>N</sub>  
 RC [[aiuto]<sub>N</sub>##[[macchina]<sub>N</sub>+ista<sub>ΔNN</sub>]<sub>N</sub>]<sub>N</sub>  
 CIC [#aiuto]<sub>N</sub>##[[macchina]<sub>N</sub>+ista<sub>ΔNN</sub>]<sub>N</sub>]<sub>N</sub>  
 Uscita [aiuto macchinista]<sub>N</sub>

(6)では、まず<sup>8)</sup>、レキシコンで括弧付きの[aiuto]<sub>N</sub>と[macchina]<sub>N</sub>が列挙され、派生規則により、[macchina]<sub>N</sub>に接尾辞+istaが付加される。そして、複合規則により内部境界をもった[[aiuto]<sub>N</sub>##[[macchina]<sub>N</sub>+ista<sub>ΔNN</sub>]<sub>N</sub>]<sub>N</sub>が生成され、語彙挿入の取り決めによって外部境界を付与したあと、[aiuto macchinista]<sub>N</sub>として出力される。このように、CL 複合語は、接尾辞をSUFで示すと、(7a)のように複合語の第二要素の内部に接尾辞を持つものと、(7b)のように第一要素の内部に接尾辞を持つような構造をとる。

(7) a. [[ P<sub>1</sub> ]##[[ P<sub>2</sub> ]+SUF]]  
 b. [[[ P<sub>1</sub> ]+SUF]##[ P<sub>2</sub> ]]

一方、CS 複合語の camposantiere を同様に記述してみると、(8)のようになる。

(8) Diz [campo]<sub>N</sub>, [santo]<sub>A</sub>  
 RD [campo]<sub>N</sub>, [[santo]<sub>A</sub>+iere<sub>ΔAA</sub>]<sub>A</sub>  
 RC [[campo]<sub>N</sub>+[[santo]<sub>A</sub>+iere<sub>ΔAA</sub>]<sub>A</sub>]<sub>N</sub>

(8)は、[campo]<sub>N</sub>と[santo]<sub>A</sub>がレキシコンに現れ、派生規則により[santo]<sub>A</sub>に接尾辞+iereが付加され、複合規則により、[[campo]<sub>N</sub>+[[santo]<sub>A</sub>+iere<sub>ΔAA</sub>]<sub>A</sub>]<sub>N</sub>が生成されることを示している。しかしながら、このようにして生成された構造には明らかに問題がある。それは、santoに接尾辞+iereが付いた\*santiereが実在しないということが示しているように、派生規則により付加される+iereが、名詞に付加する接尾辞であるにも拘らず、形容詞に付加しているという点に見られる。このことを解決するために、Scalise(1990)は、派生規則と複合規則の適用順序を入れ替えるloop(逆戻り)という操作により、CS 複合語を生成させている。つまり、camposantiereの生成は、(9)のように、複合規則によって[[campo]<sub>N</sub>+[[santo]<sub>A</sub>]<sub>N</sub>を生成させてから、複合語全体に+iereを付加することになる。

(9) RC [[campo]<sub>N</sub>+[[santo]<sub>A</sub>]<sub>N</sub>  
 RD [[[campo]<sub>N</sub>+[[santo]<sub>A</sub>]<sub>N</sub>+iere<sub>ΔNN</sub>]<sub>N</sub>  
 Uscita [camposantiere]<sub>N</sub>

このことから、CS 複合語の構造は(10)のように、複合語の外側に接尾辞を持つような構造となり、要素内部に接尾辞を持つ CL 複合語とは異なる内部構造を持つことになる。

(10) [[[ P<sub>1</sub> ]+[ P<sub>2</sub> ]]+SUF]

以上のことを前提として、さらに語彙部門で起こる屈折規則を加えて、CL 複合語と CS 複合語の内部構造を分析していくことにする。

3. イタリア語複合語と屈折規則

まず、CL 複合語における複数形は、例外なく P<sub>1</sub> と P<sub>2</sub> の両方に屈折形態が現れる。一般的に、名詞句において、名詞と形容詞は性と数の一致が起こるが、これと全く同じことが CL 複合語内部に生じることになる。例えば、(11)にあるように、*buco nero* は *buchi neri*、*mala lingua* は *male lingue* というように、形容詞は名詞の性と数に一致する。

(11) <N+A>: *buco nero* → *buchi neri*/ *servizio pubblico* → *servizi pubblici*

<A+N>: *mala lingua* → *male lingue*/ *mezzo soprano* → *mezzi soprani*

これらを 2. で示した語彙部門のモデルに当てはめてみると、(12)のようになる。

(12) a. Diz	[ <i>servizio</i> ] <sub>N</sub> , [ <i>pubblico</i> ] <sub>A</sub>	b.	[ <i>mezzo</i> ] <sub>A</sub> , [ <i>soprano</i> ] <sub>N</sub>
RC	[[ <i>servizio</i> ] <sub>N</sub> ##[ <i>pubblico</i> ] <sub>A</sub> ] <sub>N</sub>		[[ <i>mezzo</i> ] <sub>A</sub> ##[ <i>soprano</i> ] <sub>N</sub> ] <sub>N</sub>
RF	[[[ <i>servizio</i> ] <sub>N+i</sub> ] <sub>N</sub> ##[[ <i>pubblico</i> ] <sub>A+i</sub> ] <sub>A</sub> ] <sub>N</sub>		[[[ <i>mezzo</i> ] <sub>A+i</sub> ] <sub>A</sub> ##[[ <i>soprano</i> ] <sub>N+i</sub> ] <sub>N</sub> ] <sub>N</sub>
Uscita	[ <i>servizi pubblici</i> ] <sub>N</sub>		[ <i>mezzi soprani</i> ] <sub>N</sub>

<N+A>の *servizi pubblici* の場合、レキシコンに [*servizio*]<sub>N</sub> と [*pubblico*]<sub>A</sub> が登録され、複合規則により [[*servizio*]<sub>N</sub>##[*pubblico*]<sub>A</sub>]<sub>N</sub> が生成される。そして、屈折規則により各要素に複数の形態素が付加され [[*servizio*]<sub>N+i</sub>]<sub>N</sub>##[[*pubblico*]<sub>A+i</sub>]<sub>A</sub>]<sub>N</sub> となり、[*servizi pubblici*]<sub>N</sub> として出力する。<A+N>の語彙範疇からなる *mezzi soprani* の場合も、同様に生成される。CL 複合語においては、このように例外なく複合語の各要素に複数形態素が出現する。一方、CS 複合語の場合には、CL 複合語と同様、各要素に複数形態素が付加されるものと、語末にだけ複数形態素が出現するものが見られる。便宜上、各要素に複数形態素が出現するものを CSI 複合語、語末に複数形態素が現れるものを CSII 複合語と呼ぶことにする。最初に、各要素に複数形態素が出現する CSI 複合語としては、(13)に示した *cartastraccia* や *altoforno* などが挙げられる。

(13) <N+A>: *cartastraccia* → *cartestracce*/ *fico secco* → *fichisecchi*

<A+N>: *altoforno* → *altiforni*/ *mezzobusto* → *mezzibusti*

このような CSI 複合語を語彙部門で生成させると、(14)のようになる。

(14) a. Diz	[ <i>fico</i> ] <sub>N</sub> , [ <i>secco</i> ] <sub>A</sub>	b.	[ <i>mezzo</i> ] <sub>A</sub> , [ <i>busto</i> ] <sub>N</sub>
RC	[[ <i>fico</i> ] <sub>N</sub> + [ <i>secco</i> ] <sub>A</sub> ] <sub>N</sub>		[[ <i>mezzo</i> ] <sub>A</sub> + [ <i>busto</i> ] <sub>N</sub> ] <sub>N</sub>
RF	[[[ <i>fico</i> ] <sub>N+i</sub> ] <sub>N</sub> + [[ <i>secco</i> ] <sub>A+i</sub> ] <sub>A</sub> ] <sub>N</sub>		[[[ <i>mezzo</i> ] <sub>A+i</sub> ] <sub>A</sub> + [[ <i>busto</i> ] <sub>N+i</sub> ] <sub>N</sub> ] <sub>N</sub>
Uscita	[ <i>fichisecchi</i> ] <sub>N</sub>		[ <i>mezzibusti</i> ] <sub>N</sub>

(14a)の *fichisecchi* の場合、複合規則で+の境界を持った [[*fico*]<sub>N</sub>+ [*secco*]<sub>A</sub>]<sub>N</sub> を生成し、屈折規則により各要素

末に複数形態素をとる。このような複数形態をとる CS I 複合語には、複合語から接尾辞を付加して派生語を生成するものがほとんど見られない<sup>8)</sup>ため、loop による派生規則と複合規則の適用順序の入れ替えは、必要となる。また、(12)で示した CL 複合語の生成と比較しても、内部境界の#と+の違いが見られるものの、他の規則については全く同様に適用されることから、これらは同じ生成過程により出現すると考えられる。つまり、この CS I 複合語は、Scalise(1990)にあるように、レキシコンに登録されているのではなく、CL 複合語と同様、語彙部門における語形成規則によって生成されたと考えられる。これに対して、複合語全体の語末に複数の屈折が現れる CS II 複合語には、(15)のような *occhiocotto* や *altostrato* などがある。

(15) <N+A>: *occhiocotto* → *occhiocotti*/ *palcoscenico* → *palcoscenici*

<A+N>: *altostrato* → *altostrati*/ *mezzofondista* → *mezzofondisti*

CS II 複合語を loop を使った語彙部門の規則によって記述すると、(16)のようになる。

(16) a.	Diz	[palco] <sub>N</sub> , [scenico <sup>9)</sup> ] <sub>A</sub>	b.	[mezzo] <sub>A</sub> , [fondo] <sub>N</sub>
	RC	[[palco] <sub>N</sub> + [scenico] <sub>A</sub> ] <sub>N</sub>		[[mezzo] <sub>A</sub> + [fondo] <sub>N</sub> ] <sub>N</sub>
	RD	∅		[[[mezzo] <sub>A</sub> + [fondo] <sub>N</sub> ] <sub>N</sub> +ista <sub>ΔNN</sub> ] <sub>N</sub>
	RF	[[[palco] <sub>N</sub> + [scenico] <sub>A</sub> +i] <sub>N</sub> ] <sub>N</sub>		[[[[mezzo] <sub>A</sub> + [fondo] <sub>N</sub> ] <sub>N</sub> +ista <sub>ΔNN</sub> ] <sub>N</sub> +i] <sub>N</sub>
	Uscita	[palcoscenici] <sub>N</sub>		[mezzofondisti] <sub>N</sub>

接尾辞を持つ(16b)の *mezzofondisti* を例にとると、レキシコンに記載された二つの要素は、複合規則により [[mezzo]<sub>A</sub>+ [fondo]<sub>N</sub>]<sub>N</sub> という複合語を生成し、派生規則により接尾辞+ista を付加する。そして、屈折規則により語末に複数形態素をとる。このような CS II 複合語の生成過程を CL 複合語の生成と比較すると、異なる点が二点見られる。

(17) a. <CL>	b. <CS II>
Diz	[P <sub>1</sub> ], [P <sub>2</sub> ]
RD	[P <sub>1</sub> ], [[P <sub>2</sub> ]+SUF]
RC	[[P <sub>1</sub> ##[P <sub>2</sub> ]+SUF]]
RF	[[[P <sub>1</sub> ]+Infl]##[[P <sub>2</sub> ]+SUF]+Infl]]

Diz	[P <sub>1</sub> ], [P <sub>2</sub> ]
RC	[[P <sub>1</sub> ]+[P <sub>2</sub> ]]
RD	[[[P <sub>1</sub> ]+[P <sub>2</sub> ]]+SUF]
RF	[[[[P <sub>1</sub> ]+[P <sub>2</sub> ]]+SUF]+Infl]

(17a)は、CL 複合語の規則適用を、(17b)は、CS II 複合語の規則適用を示している。両複合語の異なる点の一つ目は、CS II 複合語を生成するために、派生規則と複合規則の適用順序を逆にする必要があるということである。これは loop という特別な手段をとって処理している。もう一つは、屈折規則に関するもので、名詞と形容詞からなる複合語に二種類の屈折規則の存在を認めなければならないということである。つまり、各要素に屈折形態素を付加する CL 複合語や CS I 複合語の規則とは異なって、CS II 複合語のために、複合語全体の語末に屈折形態素が付く規則を選択し適用する必要が生じる。このように、(17)のような過程によって複合語生成が行われると仮定すると、語彙部門内に loop の適用の有無や二種類の屈折規則を選択して適用する特別な規程が存在しなければならないことになる。しかしながら、出力として出現する複合語を分析するに限

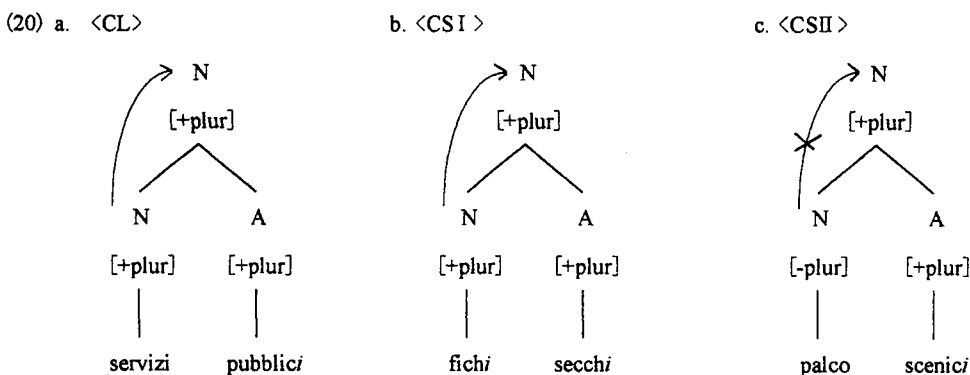
り、このような規準を見出すのは困難である。そこで、このことを解決するために、(18)を提案し、その妥当性を検討していくことにする。

(18) CL 複合語と CSI 複合語は、語彙部門内の語形成規則によって生成される。一方、CSII 複合語は、レキシコンに列挙されている。

(18)に示したように、CSII 複合語がレキシコンに列挙されているとすると、mezzofondisti の生成は、(16b)でなく(19b)のようになる。

(19) a.	Diz	[palcoscenico] <sub>N</sub>	b.	[mezzofondo] <sub>N</sub>	c.	[piano] <sub>N</sub>
RD		∅		[[mezzofondo] <sub>N</sub> +ista <sub>ΔNN</sub> ] <sub>N</sub>		[[piano] <sub>N</sub> +ista <sub>ΔNN</sub> ] <sub>N</sub>
RF		[[palcoscenico] <sub>N</sub> +i] <sub>N</sub>		[[[[mezzofondo] <sub>N</sub> +ista <sub>ΔNN</sub> ] <sub>N</sub> +i] <sub>N</sub>		[[[[piano] <sub>N</sub> +ista <sub>ΔNN</sub> ] <sub>N</sub> +i] <sub>N</sub>
Uscita		[palcoscenici] <sub>N</sub>		[mezzofondisti] <sub>N</sub>		[pianisti] <sub>N</sub>

(19b)は、レキシコンに記載された mezzofondo が、派生規則により+ista を付加し、屈折規則により複数形態素が付いて[mezzofondisti]<sub>N</sub> として出力することを示している。これは、(19c)の単純語である piano が pianisti になる生成過程と全く同じものとなる。このように、CSII 複合語がレキシコンに登録されていると仮定することにより、語彙部門における loop による処理や屈折規則の選択適用が不必要となる。CSII 複合語が語形成規則によって生成するのではなく、レキシコンに登録されていると考える理由として、語彙部門内の規則適用の不自然さ以外に、CSII 複合語の主要部の欠如ということが挙げられる。一般的に、内心構造を持つ複合語は、「複合語全体の語彙範疇を決定する」主要部<sup>10)</sup>を持つが、本稿では、名詞と形容詞からなる複合名詞を対象としているため、主要部はすべて名詞の要素になる。この主要部における様々な素性は、「主要部と複合語の素性は同一の集合である」という「素性濾過の条件」<sup>11)</sup>によって、複合語全体に濾過される。例えば、〈N+A〉の語彙範疇からなる複合語について、主要部と複合語の関係を見てみると、CL 複合語は、(20a)のように servizi という名詞要素の「複数」(+plur)という素性を複合語全体が受け継いでいる。



また、CSI 複合語である(20b)の fichisecchi も、同様に名詞の要素である fichi の「複数」の素性を複合語が受け継いでいる。これに対して、CSII 複合語である(20c)の palcoscenici は、名詞要素である palco が「単数」(-plur)という素性を持つにも拘らず、複合語全体としては「複数」という素性を提示することから、素性濾過が行

われていないということが分かる。このように CS II 複合語が「素性濾過の条件」を違反するということは、CS II 複合語が複合語の構造を有していない証拠となる。以上のことから、複合語としての構造を保持しない CS II 複合語は、単純語と同質の性質を持っていることから、語形成規則によって生成するのではなく、内部構造を持たない単純語と同様、レキシコンに登録されていると考えられる。

本節では、イタリア語複合語には、語彙部門で生成する CL 複合語、語彙部門で生成するとともに第一要素のアクセントを失った CSI 複合語、そして初めからレキシコンに登録されている CSII 複合語という三種類の複合語が存在することを指摘した。この三種類の複合語は、CL 複合語→CSI 複合語→CSII 複合語という順序で、要素間の形態的緊密性が増加していく。次に、この形態的緊密性の増加を語彙化のプロセスと捉え、三種類の複合語の関係を考察していくことにする。

#### 4. 語彙化の過程

複合語の変遷に関して、Scalise(1994)には、「一般的傾向として、複合語は、時間の経過によって主要部が認識できなくなり、内部構造を失い、語末に屈折が起こるようになる」というような指摘が見られる<sup>12)</sup>。このことを3.で考察した三種類の複合語に当てはめて、その構造を示すと、(21)のようになると考えられる。

##### (21) 語彙化の過程

	単数形態	複数形態
CL 複合語	[[P <sub>1</sub> ##[P <sub>2</sub> ]]	[[[P <sub>1</sub> +Infl]##[P <sub>2</sub> +Infl]]
CSI 複合語	[[P <sub>1</sub> ]+[P <sub>2</sub> ]]	[[[P <sub>1</sub> +Infl]+[P <sub>2</sub> +Infl]]
CSII 複合語	[P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> ]	[[P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> +Infl]]

(21)は、語彙部門で語形成規則により生成される CL 複合語が、アクセント規則の適用を受けて CSI 複合語となり、要素間の内部構造が欠落し、レキシコンに登録されると、CSII 複合語になるという語彙化の過程を示している。このようなことは、複数形を二種類持ち、なおかつ、その一方が古い形や余り使われない形として残っているような複合語から推察できると思われる。例えば、[terra]と[cotta]の複合語には、(22a)のような CL 複合語と(22b)のような CSI 複合語が存在する。

##### (22) a. <CL>

RF     [[[[terra]<sub>N+e</sub>]<sub>N</sub>##[[cotta]<sub>A+e</sub>]<sub>N</sub>]<sub>N</sub>  
 Uscita [terre cotte]<sub>N</sub>

##### b. <CSI>

[[[[terra]<sub>N+e</sub>]<sub>N</sub>+[[cotta]<sub>A+e</sub>]<sub>N</sub>]<sub>N</sub>  
 [terrecotte]<sub>N</sub>

これらのうち(22a)の CL 複合語は、現代イタリア語では余り使われない形態とされる。このことは、(22)が CL 複合語からアクセント規則の適用を受ける CSI 複合語への移行段階にある複合語であることを示唆していると思われる。このようなものには、(22)の他に、colli torti/ collitorti, buone lane/ buonelane などがある。同じく、(23)の[basso]と[rilievo]からなる複合語には、CSI 複合語である bassirilievi と CSII 複合語である bassorilievi の二種類の複数形があり、CSI 複合語の bassirilievi は、古態とされる。



(23) a. <CSI>

RF [[[[basso]<sub>A+i</sub>]<sub>A</sub>][[rilievo]<sub>N+i</sub>]<sub>N</sub>]<sub>N</sub>

Uscita [bassirilievi]<sub>N</sub>

b. <CSII>

[[bassorilievo]<sub>N+i</sub>]<sub>N</sub>

[bassorilievi]<sub>N</sub>

このようなものは、(23)の他に、campisanti/ camposanti, bassipiani/ bassopiani, mezzenotti/ mezzanotti などに見られ、語形成規則によって生成される CSI 複合語からレキシコンに登録される CSII 複合語への移行段階にある複合語と考えられる。この他にも複数形態を二種類以上持つ複合語は、イタリア語には多く存在し<sup>13)</sup>、このような複数形態の揺れは、(21)に示した複合語における語彙化の過程の傍証になるとと思われる<sup>14)</sup>。

## 5. 結語

本稿では、語彙部門における規則適用を分析することによって、一般的に複合語と呼ばれるものに、語形成規則によって生成される CL 複合語/CSI 複合語と、レキシコンに列挙されている CSII 複合語が存在することを明らかにし、この三種類の複合語が語彙化と関係することを論じた。この語彙化に関しては、統語的な「句」から語彙的な「語」への過程と換言できると思われる。このことは、CL 複合語が、名詞句と同様、第一要素のアクセントや性・数の一致を複合語内部に保持することから「句」の性質を維持しているのに対して、CSII 複合語が、要素間の内部構造を持たない「語」の特徴を示す<sup>15)</sup>ことに代表される。このような「句」と「語」の関係が、CL 複合語→CSI 複合語→CSII 複合語という語彙化の過程とほぼ一致するのは興味深いことと思われる。

影山(1993)では、語彙部門だけでなく統語部門にも語形成操作を認めるモジュール形態論を論じている。これは、複合語に統語的なもの(「統語的複合語」)と語彙的なもの(「語彙的複合語」)が存在することに基づくものであるが、このことは、本稿で扱った語形成規則による複合語とレキシコンに登録される複合語の二面性に類似する。CL 複合語や CSI 複合語は、一般的に統語的な部類に属する屈折が複合語内部に起こることから、「統語的複合語」に相当し、CSII 複合語は、その形態的緊密性から「語彙的複合語」と位置づけることができる。勿論、本稿で分析した語彙論的文法モデルとこのモジュール形態論には、生成部門や語の構成する単位などに差異があり、同列に論じることは難しいが、複合語には、内部構造を失って語彙化するものと、統語的機能を語内部に保持するものがあり、これらの二種類の複合語を区別して扱うということにおいて、一致点を見出すことが出来ると思われる。今後は、派生語・複合語の生成部門を含めた語形成に関する文法モデルの構築を課題としていきたい。

\* 本稿は、日本ロマンス語学会第 35 回大会(金沢大学)における口頭発表を加筆・訂正したものである。席上貴重な助言、質問をいただいた方々に感謝する。

\* 本稿は、平成 8 年度文部省科学研究費補助金(奨励研究(A))「イタリア語における複合語生成の確立過程について」(課題番号 08710372)の交付を受けて行った研究成果の一部である。

註

- 1) (3b)に示されている複合語の意味特徴については、CL 複合語で"opaco"である *secondo fine* , CS 複合語で"composizionale"である *mezzaluna* などの反例を挙げることができる。また、意味上、"opaco"が"composizionale"であるかは、相対的に判断されるものであり、客観的判断を得るのは困難であると思われる。(3c)については、母音変異の中でも特に、語尾切断現象に限定すると、〈A+N〉の CS 複合語において語尾切断が起こる形容詞は、*buono/ grande/ malo* などであり、義務的な切断に限られている。CL 複合語においてもこのような語尾切断は、*gran premio/ buon fresco* などに見られる。
- 2) 例えば、CL 複合語/CS 複合語の両形を持つ *terraferma/ terra ferma* において、CL 複合語の *terra ferma* が意味的に"composizionale"であり、語形成規則によって生成されるのに対し、CS 複合語の *terraferma* が意味的に"opaco"で、レキシコンに列挙されるという説明は、明らかに矛盾があると思われる。
- 3) 複合名詞の複数形に関して、Ceppellini(1990: 112)では、"mutano le desinenze di entrambe le parole"とあり、語末に屈折が現れる形態の記述が見られない。また、Lepschy & Lepschy(1988: 185)では、原則的に"both components go into plural"とあるが、"if the awareness of the composition has been obscured the word is treated as a unit"と、複合語という認識の欠落によって、語末に複数形態が出現することが記述されてある。また、Serianni(1989: 153)では、複合語の複数形態の決定要因として、"a) del tipo e dell'ordine dei loro costituenti b) del grado di fusione dei costituenti tra loro"という二つの規準を挙げている。
- 4) Scalise(1990)の文法モデルは、屈折規則を語彙部門に設定する語彙論(Lessicalista Forte)の立場である。語彙論における文法モデルの妥当性や語彙部門の設定などについては、紙幅の都合により別の機会に述べることにする。
- 5) "Le semiparole sono: (i) parentessizzate, (ii) non hanno una categoria lessicale, (iii) non contengono confini interni, (iv) non sono delimitate da un confine di parola." (Scalise (1994: 81))
- 6) Scalise(1990: 151)では、Allen(1978)の Extended Ordering Hypothesis に屈折規則を加えた Mohanan(1982)のモデルをイタリア語語形成に応用し、次のような順序付けを提案している。
 

I Livello	derivazione +
II Livello	derivazione #
III Livello	composizione
IV Livello	flessione
- 7) 接尾辞+ista の後にある△の最初の N は接尾辞が付加される語彙範疇、後の N は接辞付加された後の派生語の語彙範疇を示す。
- 8) *acquaforte* → *acquafortista* などのように、CSI 複合語が派生語を生成するものは、僅かしか見られない。
- 9) *scenico* は、名詞 *scena* に接尾辞+ico を付加した派生語と一般的に分析されるが、形態的緊密性の高さから本稿では、レキシコンに登録されているという立場をとる。

- 10) Williams(1981)参照.
- 11) Selkirk(1982)参照.
- 12) "Nel corso del tempo (e probabilmente in relazione a fatti extralinguistici come la frequenza d'uso) i composti tendono a perdere trasparenza, nel qual caso la testa diventa meno identificabile e il composto, percepito come privo di struttura interna, viene flesso secondo la regola generale di flessione dell'italiano, vale a dire 'a destra'." (Scalise (1994: 138))
- 13) 本稿で示したもの以外に, CL 複合語/CSII 複合語を持つ porci spini/ porcospini や CL 複合語/CSI 複合語/CSII 複合語のすべての形態を持つ male venture/ maleventure/ malaventure などがある.
- 14) このような要因には, Scalise(1994)の指摘にあるような「使用頻度」などの他, 語彙としての確立の度合いや話し手のレキシコンの登録の量などが深く関係していると思われる.
- 15) CSII 複合語は, falsariga のように, 性の一致において, 要素間の内部構造を保持しているように見える. しかし, 実際には, CSII 複合語が内部構造を持つことはない. 例えば, <A+A>の語彙範疇からなる複合形容詞の sordomuto における女性形が, sordomuta であるように, CSII 複合語は, 統語レベルにおいて P<sub>i</sub> に性の屈折を許さない. このことは, CSII 複合語が, 性の一致においても内部構造を持たないことを示している.

#### 参考文献

- Allen, M. R. 1978. *Morphological Investigations*. Ph. D. dissertation, The University of Connecticut.
- Anderson, S.R. 1982. *Where's Morphology?*. *Linguistic Inquiry* 13. pp.571-612.
- Ceppellini, V. 1990. *Dizionario grammaticale per il buon uso della lingua italiana*. DeAgostini.
- Dardano, M. 1978. *La formazione delle parole nell'italiano di oggi*. Bulzoni.
- Halle, M. & K.P. Mohanan. 1985. *Segmental Phonology of Modern English*. *Linguistic Inquiry* 16. pp.57-116.
- Lepschy, A. L. & G. Lepschy. 1988. *The Italian Language Today*. New Amsterdam.
- Mohanan, K. P. 1982. *Lexical Phonology*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Selkirk, E. O. 1982. *The Syntax of Words*. MIT Press.
- Scalise, S. 1990. *Morfologia e lessico: una prospettiva generativista*. Il Mulino.
- . 1994. *Le strutture del linguaggio: morfologia*. Il Mulino.
- Serianni, L. 1989. *Grammatica italiana: italiano comune e lingua letteraria*. UTET.
- Williams, E. 1981. On the Notions 'Lexically Related' and 'Head of a Word'. *Linguistic Inquiry* 12. pp.245-274.
- 影山太郎. 1993. 「文法と語形成」. ひつじ書房.
- 上野貴史. 1996. 「イタリア語における《N+N》複合語の生成: Headと語形成レベル」. 言語文化学会論集 第7号. pp.21-42.